**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第５９回　（２０２０年１月１４日）**

**・第５９回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」３４、３５頁**

（12月の復習）

参加者：現代の私たちは体意識が強いカリユガの時代に生きています。そして体意識が消えないとリシたちがしたようなギャーナ・ヨーガの実践はできません。その代わりにバクティの道をタクールは勧められました。それから、バクティの神に対する五つの態度の説明があり、その中でも神を父と見る態度をタクールは勧められました。仕事は体を使ってやるので、ギャーナ・ヨーガだけでは矛盾が出る、だからそのような態度を仕事のときもとるべきだ、という話でした。

マハーラージ：仕事のときだけではありません。食事のときもお風呂のときも睡眠のときも、朝から晩まで生活全部、体でやりますから。

参加者：それからギャーニとヴィッギャーニの話がありました。

ギャーニはネーティ、ネーティ、これではない、これではない、という識別と放棄だけで十分。その実践を完全に行って純粋な意識を悟る、それがギャーニの目的です。

しかし、ヴィッギャーニというのは、ネーティ、ネーティ、と識別と放棄をして悟った後に、自分が放棄したものもすべてブラフマンであるということをそこまで深く理解した方で、その方は神の恩寵でこの世界に戻ってきます。

（1月の勉強）

**実践の準備について**

**①ギャーナ・ヨーガ、ディヤーナ・ヨーガ**

シュリー・クリシュナもギャーナ・ヨーガは難しいと言いました。ギャーナ・ヨーガについての印象はシュリー・ラーマクリシュナと同じですね。しかし、ギャーナ・ヨーガが簡単だと考える人もいます。そのような人は、ギャーナ・ヨーガの実践にシャマ/ダマ、ヤマ/ニヤマ、体・心・感覚のコントロールなどは必要ないと考えており、「私はアートマン」ということだけ考えていれば悟れると思っているのです。しかしそうではない。そうした準備をせずに「私はアートマン」とだけ考えることはできないからです。

パタンジャリのヨーガの実践での瞑想もそうです。準備がない限り、本当の瞑想はできません。我々の瞑想はほとんどがプラティヤハーラです。集中を少ししてもすぐに他のことに心が向いてしまうので、そこから心を引き戻してまた集中する、その繰り返しだからです。しかしディヤーナはそうではない。ディヤーナが始まると、すぐにすべての意識、外の意識がなくなる、それがディヤーナです。それは準備がないとできません。

ギャーナ・ヨーガも始めから準備が必要です。しかし、中には準備をせずに「私はギャーニだ」と考えている人もいますが、その人は自己欺瞞、自分自身をだましています。そして自分を騙していては、先に進むことはできません。

**②バクティ・ヨーガ、カルマ・ヨーガ**

バクティ・ヨーガ（カルマ・ヨーガも）には、特別な実践の準備はありません。なぜならバクティは感情ですから。感情とは、自分の性格の一つで、それだけを向けるものだからです。しかしバクティ・ヨーガにももちろん識別が必要です。何が一時的で永遠か、その識別は大事です。そうしないと感情過多になります。

バクティ・ヨーガは絶対に神への愛が必要ですがそれだけです、別の準備は必要ない。

カルマ・ヨーガのただ一つの準備は健康であることですが、バクティ・ヨーガは病気があってもできます。

**📖読み**

**『福音』３４頁下段Ｌ２１～３５頁上段Ｌ１**

*エゴは完全には消え去らない。人はサマーディから下りてくると、エゴ、宇宙、およびすべての生きものになっているのはブラフマンである、ということを認識します。これをヴィッギャーニというのです。*

（解説）

サマーディのとき私意識は消えます。そのことが『福音』の中にはっきりと書いてあります。

　*なぜヴィッギャーニは神に向かって愛の態度をとるのか。答えは『私⊸意識』がしつこくつづくから、」というものです。それはたしかに、サマーディの状態の中では消えます。*

（３６頁上段の二つ目の節）

**サマーディから戻った後の「私意識」について**

ギャーニは、サマーディのとき私意識が消え、続いて体がなくなると終わりです。しかし、ヴィッギャーニはそうではなく、例えばギャーニがこの世界に戻ってきたら「すべては一時的で幻のよう。ブラフマンだけが正しい」という態度は続きますが、私意識は戻ります。

しかし重要なことは、サマーディに入る前の私意識と、サマーディから戻ったあとの私意識は全く異なるということです。サマーディに入る前の私意識は、「体、心、感覚を合わせた意識」です。そしてサマーディから戻ったあとの私意識は、ひとつには「魂意識」、もうひとつには「私はブラフマンの一部分という意識」です。前者は「すべてがブラフマン（私はアートマン）」という私意識であり、後者は「私はブラフマンの召使い/息子/娘」というバクタの私意識で、シュリー・ラーマクリシュナの場合のそれは「私はマザー・カーリーの息子」という愛の態度でした。

**バクタ・ヴィッギャーニについて**

バクタ・ヴィッギャーニ、つまりバクタがヴィッギャーニになると、サマーディから戻った後は次のような態度になります。

・ダーシャの態度、つまり、私は神（例えばマザー・カーリー）の召使、息子、娘という態度。

・神、例えばマザー・カーリーとブラフマンは同じであると理解して、すべてのものと自分との関係は、「すべてにマザー・カーリーすなわちブラフマンを見る」という態度。

その両方です。『福音』の中に「カーリーとブラフマンは一緒です」という歌がありますね。

自分の中にもマザー・カーリーとブラフマンがいます。すべての人に同じマザー・カーリーとブラフマンがいます。と同時にマザー・カーリーの「あらわれ」はすべて一時的だということも忘れません。それがヴィッギャーニです。このヴィッギャーニの「すべてが神、すべてがブラフマン」とみる態度は、「すべては幻」とみるギャーニと比べると、ナチュラル、自然ではないですか？

シュリー・ラーマクリシュナご自身を例として考えれば、すべてはマザー・カーリーです。善い人、罪びと、女性、男性、みんなマザー・カーリーです。また、マザー・カーリーとブラフマンは同じものの別のあらわれです。

**サマーディの後のエゴで執着は出ない**

サマーディに入る前のエゴ（私意識）と入った後のエゴの違いは、

・サマーディに入る前はエゴの結果で束縛、執着が出るが、

・サマーディから戻った後のエゴで束縛は出ない、という点です。

シュリー・ラーマクリシュナは、鉄でつくった武器がサマーディに入ると金でつくった武器になるが、金の武器で殺すことはできない、と言っています。サマーディから戻ったヴィッギャーニは外から見ると、怒りなどいろいろあるように見えても、本当はそうではない。怒っていても本当は怒ってない。その状態です。

例えば縄。

縄は燃やすと、燃え残りの形は縄のままですが、それを吹くと吹き飛びます。縄があるように見えても実際はないですね。

またホーリー・マザーのことを考えてください。ホーリー・マザーはラドゥ（姪）にとても深い執着を持っているように見えました。時々、信者も「マザー、あなたはラドゥ、ラドゥとマーヤーにとらわれています」と文句を言うと、ホーリー・マザーは「自分もマーヤーですから」と答えました。（笑い）　しかし外から見ると執着に見えても、本当はホーリー・マザーの中には執着がありません。

**ホーリー・マザーもシュリー・ラーマクリシュナもこの世界に戻るために、この世界に引き付けられるものが必要だった**

ではどうしてホーリー・マザーには、ラドゥに対するそのような執着が必要だったでしょうか。なぜなら、ホーリー・マザーは、シュリー・ラーマクリシュナの体がなくなった後は、いつもサマーディの状態にとどまりたい、体を棄ててご自分の本性に戻りたかった。しかしシュリー・ラーマクリシュナの教えを皆さんに伝え導く、という大きな仕事が残っていました。その仕事をするためにホーリー・マザーの体をこの世界にとどめておくには、この世界に引き付けるものが必要でした。引き付けるものが何もないと心はすぐ神と一つになるからです。だからラドゥへの執着は自分のためにではなく、皆さんのために必要でした。

シュリー・ラーマクリシュナはサマーディから戻るとき、「私は水を飲みます」という小さな願いで心を神から戻しました。この世界に引き付けるものが何もないとサマーディから戻れないからです。もしサマーディから戻らないと体がなくなり、皆さんに教えることができません。この世界に引き付けるための道具が水です。だから、『福音』の中には「私はちょっと水を飲みたい」とシュリー・ラーマクリシュナがおっしゃるのですが、水を持ってくると、「いりません」と返答される、というくだりが何度も出てきます。

もう一つ、シュリー・ラーマクリシュナをこの世界に引き付けることに関して、トゥリヤーナンダジの回想録の中から引用します。

昼食時、シュリー・ラーマクリシュナのために小さなポットにさまざまな種類のカレーが用意されていました。シュリー・ラーマクリシュナはそのカレーを子供のように少しずつ味見するだけでした。シュリー・ラーマクリシュナは少ししか食べないのに多くの種類のカレーを準備しないと食べませんでした。それを見ていたトゥリヤーナンダジの心に「あまり召し上がらないのにどうしてそんなにたくさんのカレーの準備が必要なのだろうか？」という疑問が浮かびました。シュリー・ラーマクリシュナはいつも相手の心が分かったので、「『これを食べる、それを食べる、あれを食べる』と考えることで、心を真理から戻しているのです」と答えました。

シュリー・ラーマクリシュナは、もしカレーを1種類だけ食べると、ただ一つの存在であるブラフマン、真理のほうに行ってしまう。なぜなら、ということを思い出すだけで、心がすぐに真理に向かい、サマーディに入るからです。そうすると食べることすらできません。そのために多数のものに心を置くことで、心を一つのもの（真理）に戻さない。そのためにカレーをたくさん用意していたのです。シュリー・ラーマクリシュナの心はいつもいつもブラフマンに向かっていますが、その心をさまざまな小さな願いで強引にこの世界に引き戻しています。皆さんを教え導くために。　　　☞（『神を求めて』30,31頁参照）

考えてください、どれほどの心をシュリー・ラーマクリシュナは持っていたか！　考えてください、このエピソードがどれほど深いかを！

ヴィッギャーニはサマーディの後に「私意識」が戻っても、すべての中に神を見ます。形や名前を持つものが、本当は一つの存在である。そのことを常に念頭に置きながら、人びとに教えます。そうしないで、「みんなが幻」と考えながら教えることはできません。

そしてホーリー・マザー、シュリー・ラーマクリシュナの直弟子、ブラフマーナンダジ、スワーミージー、などみんなヴィッギャーニです。

**すべての中に神、ブラフマンを見ることは、高いレベルの求道者の目的**

トゥリヤーナンダジの人生前半の目的は、さまざまな聖典の勉強をしてギャーニになりサマーディの経験をすることでした。聖典にはそれが最高であると書いてあるし、シャンカラーチャーリヤなどの実践もそのようでした。ギャーニはブラフマンと一つになるとそれで終わりですから。しかしシュリー・ラーマクリシュナは何度も言いました、「それは低い」、「その目的は求道者の低いレベルの目的です。もっと高いのはヴィッギャーニです。サマーディの状態から戻り、皆さんの中に同じブラフマンを見る。一度はブラフマンと一つになり、また戻ってすべての中にブラフマンを見る。それが本当は高いレベルの求道者の目的です」と。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　☞（『神を求めて』20頁参照）

ヴィッギャーニは一度ブラフマンと一つになります。それが大事です。それからまた戻って、すべては神の遊び、すべては神だと見ます。その人はジヴァンムクタ（生きている間に解脱した人）です。ジヴァンムクタはサマーディから戻ると、本当はこの世界を楽しんでいます。みんな神の遊びであると理解して楽しんでいるのです。

参加者：神の遊びという考え方はヴィッギャーニの考え方ですか？

それの前に自分が神を悟らないと、「神の遊び」という考えは難しいです。なぜなら悟らないと「神の遊び」というアイデアは安定しないからです。だから最初は「すべての本性は神」という考えが大事です。「すべては神の遊び」ということは、想像で考えても本当は理解できません。そしてそこから執着が出る可能性があります。

カルマ・ヨーガのことを考えてみてください。

悟る前にカルマ・ヨーガをしても束縛が出るかもしれない。本当は、エゴがなくならないと、エゴを取り除かないと、本当のカルマ・ヨーガはできない。悟る前ももちろんできるだけカルマ・ヨーガを実践しますが、本当のカルマ・ヨーガは、悟った人だけができる。悟る前にカルマ・ヨーガを実践していると、例えば、名声欲も出る可能性があります。シュリー・ラーマクリシュナが「あなたは、私は利己的なことは何もない、と言っているけれど、いつ名声欲が入るか分からないです」と言っているように。

しかし、悟った後は「すべては神」であることが分かるので、「私は神の道具です、神の息子です、神の娘」と安定して思える。それがヴィッギャーニです。ギャーナ・ヨーガの実践でヴィッギャーニになることもできますし、バクティ・ヨーガの実践でヴィッギャーニになることもできます。

バクティのヴィッギャーニについては、ラーマクリシュナ意識の講話のときにハヌマーン、トゥリヤーナンダジの例を出して話しました。トゥリヤーナンダジは「ラーマクリシュナは我々のドヴァイタ（二元論）、アドヴァイタ（非二元論）、ヴィシシュタ（アドヴァイタ）（限定的非二言論）、それらの全てです」と言いました。

例えば

・体意識があるとき、「私はあなたの召使です」。

・私は体があるが魂もある。その意識がある間、「私はあなたの一部分です」。

・魂意識だけにとどまっている間、「あなたと私は一緒です」。

それがバクタのヴィッギャーニです。

ギャーニがサマーディから戻ってヴィッギャーニになっても、バクタがサマーディから戻ってヴィッギャーニになってもどちらの場合も、エゴはまた戻ります。しかし、その状態はもちろん高いレベルのことです。それについてシュリー・ラーマクリシュナは説明しています。

参加者：３４頁の最後『これをヴィッギャーニというのです』というところですが、英語の本だとヴィッギャーナになっています。次の出版のときに訂正しますか？

はい。ヴィッギャーナは一つの状態で、ヴィッギャーニはその状態の経験のある人です。

**📖読み**

**『福音』３５頁上段Ｌ２～４**

*知識の道は真理に通じるし、知識と愛の結合した道も同様です。愛の道もまた、この目標に到達する。愛の道は知識の道と同じように正しい。すべての道が、最後には同一の真理に到達するのです。*

（解説）

ところで誤解しないようにしてください。シュリー・ラーマクリシュナはバクティ・ヨーガだけが正しい、とは言っていません。

一つずつすべて悟りのための道です。

**ギャーナ・バクティの道：ギャーナ　ミスラ　バクティ　Jnana misrā bhakti**

ギャーナの道は「識別の道」です。すべての一時的なものを放棄して、永遠なもの真理だけにいつも集中して考えます。個人的なレベル、ミクロレベルで「私は体ではない、心ではない、感覚ではない、私は魂意識」、またマクロレベルで「宇宙についてすべては幻です。その基礎はブラフマンだけです」と識別をしています。それがギャーナ・ヨーガの道で、それも正しいです。

ギャーナ・バクティの道は、ギャーナとバクティを合わせています。それもまた別の道です。　（カルマ・ヨーガ、ギャーナ・ヨーガ、バクティ・ヨーガ、ラージャ・ヨーガがありますが、それらを合わせてもまた別の道ができます）

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはラーマクリシュナ僧院にギャーナ・バクティの道を広めました。ギャーナ・バクティは、ギャーナ　ミスラ　バクティと言い、バクティがベースでギャーナを合わせています。例えばミキサーで二つのフルーツでミックスジュースを作るとき、ベースがバナナで少しリンゴを加えて（自分の好みで）作るように、ギャーナ　ミスラ　バクティは、バクティがベースでちょっとギャーナをミックスします。ラーマクリシュナ僧院ではギャーナ・バクティの道はかなりあります。我々のためにギャーナ　ミスラ　バクティはとても良いからです。どうして良いのでしょうか？

参加者：認識できるものをすべて一時的だと識別しながら、神の道具として、神のしもべとして働く、神を愛する。

そうですね。ベースがバクティですから。

例えば、我々はシュリー・ラーマクリシュナの弟子ですから、シュリー・ラーマクリシュナは我々の全てです。すべての中にシュリー・ラーマクリシュナを見て、シュリー・ラーマクリシュナを喜ばせるために働き、シュリー・ラーマクリシュナにすべてお任せします。

シュリー・ラーマクリシュナがベースです。そこにギャーナをミックスする。つまり識別します。神の信者にも識別は必要ですから。

そしてラーマクリシュナの信者はこのように識別します。

すべてはラーマクリシュナ

ラーマクリシュナの「あらわれ」はすべて一時的

ラーマクリシュナの形も一時的にあらわれたもの

シュリー・ラーマクリシュナの本性はブラフマンだけ

**シュリー・ラーマクリシュナのギャーナ・バクティの実践**

シュリー・ラーマクリシュナが礼拝すると決めた神は、マザー・カーリーでした。だからシュリー・ラーマクリシュナがニルヴィカルパ・サマーディに入ろうとしたときマザー・カーリーの形があらわれてブラフマンと自分の心は一つになれなかった。自分の魂と純粋な意識、ブラフマンとが一つにならない。そのことをトーター・プリーに伝えると、トーター・プリーは「どうしてブラフマンに集中できないのだ」と言って、シュリー・ラーマクリシュナの眉間にガラスの破片を突き刺して、「心をこの一点に集中せよ」と言いました。

後にシュリー・ラーマクリシュナは言いました。

「私はそのとき断固とした決意を持って、知識を剣と見て知識の剣でマザー・カーリーのイメージを斬りました。ギャーナの剣でマザー・カーリーのイメージを斬りました。そうすると、すぐにブラフマンと私の心は一つになりました」と。

☞（『ラーマクリシュナの生涯』306頁参照）

それからシュリー・ラーマクリシュナは三日間サマーディに入り続けたのです。

シュリー・ラーマクリシュナもこのようにギャーナ・バクティを実践されました。

マザー・カーリーはブラフマンの一つのあらわれです。マザー・カーリーにも、①ニッティヤ・カーリー、永遠なカーリー（永遠なカーリーとブラフマンは同じ）と、②形を持ったカーリー、などさまざまな姿があります。

また、シュリー・ラーマクリシュナにも二つの姿があります。

・あらわれた姿。

我々には体がありますから、心は体、形がないものに集中したり、考えたり、想像することはできません。だからシュリー・ラーマクリシュナは我々信者のために形を持たれたのです。

・形に集中ができたら、次のステップはシュリー・ラーマクリシュナの別の姿です。

シュリー・ラーマクリシュナはブラフマン。それもギャーナです。

参加者：その場合は段階を経てやるのですか？

そうです。バクティもギャーナも、最初から「すべては一時的、神だけが永遠」という識別をする必要があります。それだけでなく、自分の決めた神についてもギャーナ（識別）が必要です。しかしその場合の識別は最初からではない。シュリー・ラーマクリシュナが自分の決めた神だとしたら、最初は「神のあらわれた姿としてのシュリー・ラーマクリシュナ」を瞑想し、さらに進んだ実践として「あらわれていない神の相、つまりブラフマンとしてのシュリー・ラーマクリシュナ」を瞑想します。あらわれた姿だけが正しい、と考えるのは間違いです。それが無知です。

ヒンドゥ教は偶像崇拝をする多神教だと思い込んでいる人もいますが、そうではありません。ヒンドゥ教の哲学の特徴は、神にはあらわれた姿とあらわれていない姿の二つの姿があり、両方合わせたものが神の包括的な姿ということです。それではなぜ神の姿や像が必要なのか？　形がないと神に集中ができないからです。

バクティ・ヨーガだけでは感情過多に陥る危険性があります。ギャーナ・ヨーガの危険性はさっき言ったように、あまり準備せずにギャーナ・ヨーガの実践をすると自己欺瞞に陥る可能性があります。体意識がある間、ギャーナはできないですから。だからギャーナ　ミスラ　バクティ、バクティとギャーナをミックスした道が大事です。ギャーナとバクティはとても大きな道です。その二つを合わせる。もちろんカルマ・ヨーガや他のヨーガも必要です。

ギャーナ・ヨーガも正しい、バクティ・ヨーガも正しい、ディヤーナ・ヨーガも正しい。

では我々のためにはどの道がいいか、それは、母親が子供の消化力と好みによってカレーの作り方を変えるように、自分の好みと才能（力）で道を選ぶべきです。ここではそのことについて言っています。

私意識がある間バクティは必要ですが、同時に識別する必要がある。だからギャーナ・バクティがいいと言っています。

**📖読み**

**『福音』３５頁上段Ｌ５、６**

*しかし、神がわれわれの内部にエゴという感じを残しておられるあいだは、愛の道を通るほうがらくです。*

（解説）

愛の道を通るほうがらくだといっていますが、愛の道もらくではない。

私意識がなくなり神の意識に取って代わる、ということも、先ほどのラーマクリシュナ意識の実践も簡単ではありません。頑張らないといけない。ただ、知識の道と比較するとらくだ、ということです。

**📖読み**

**『福音』３５頁上段Ｌ７～１０**

*ヴィッギャーニは、ブラフマンはスメール山のように不動であり無活動であると見ます。この宇宙は三つのグナ―サットワ、ラジャス、およびタマス―からできています。それらはブラフマンの中にあるのです。しかし、ブラフマンには属性はありません。*

（解説）

**神の姿**

**ブラフマンとブラフマンのあらわれ**

ブラフマン以外は何もない。

ブラフマンは形がなく、性質もなく、純粋な意識だけです。

ブラフマンの次の姿は、プラクリティ、根本エネルギー、ヒラニヤガルバ、ブラフマーとも言います。このときに創造があります。つまり、宇宙を五つの要素（土、水、火、風、空）で創造します。その五つの要素の中は三つのグナ、サットワ、ラジャス、タマスという性質がありますね。そのサットワ、ラジャス、タマスはプラクリティの中にあります。サットワ、ラジャス、タマスでプラクリティは成り立っていますから。

ここでは、「*ヴィッギャーニは、ブラフマンはスメール山のように不動であり無活動であると見ます」*と言っています。

ブラフマンは、なにもしない、いつも動かない、いつも状態が同じ、状態が変わらない。しかし、宇宙はそのブラフマンから出ています。そしてブラフマンと宇宙は別々のものではありません。同じものが異なったさまざまな形としてあらわれているのです。

例えば金について考えてください。金の飾り（金のあらわれ）は形も用途も名前も違いますが、本当は金だけ。金はいつも金で変わらない。金の装飾品の形は一時的で、溶かすとまた金に戻ります。それと同じで、ブラフマンとブラフマンのあらわれはいつも同じもので変わらない。ブラフマンのあらわれは、サットワ、ラジャス、タマスがいろいろ組み合わさってさまざま形となり、名前がつきます。

本文の「属性がない」という言葉の意味は、「無執着、何も関係ない、無関係」です。

なぜなら、ブラフマンはいかなるものとも関係ありませんから。ブラフマンから出たものとブラフマンは何も関係がない。

参加者：「ブラフマンには属性はありません」という翻訳が普通の日本人もちょっとイメージが分かりにくいです。

**📖読み**

**『福音』３５頁上段Ｌ１１～１３**

*ヴィッギャーニはさらに、ブラフマンであるところのものはバガヴァーン、人格神であると見ます、六つの偉大な神力を持ち、三つのグナを超越しているのがバガヴァーンです。*

（解説）

**ブラフマンのあらわれ：バガヴァーン**

「ヴィッギャーニは、ブラフマンは不動であり無活動であると見ます」と言い、ここでは、「ヴィッギャーニはブラフマンが、即ちバガヴァーンであると見ます」、と言っています。先ほど、ブラフマンの次の姿は、プラクリティ、根本エネルギー、ヒラニヤガルバ、ブラフマー、であると説明しましたが、バガヴァーンもその一つです。

ラーマクリシュナ意識（2019年12月15日逗子例会での講話）の話のときに、シュリー・ラーマクリシュナの三つの姿について話しました（サッチダーナンダ・ラーマクリシュナ、バガヴァーン・ラーマクリシュナ、アヴァターラ・ラーマクリシュナ）が、ここではブラフマンとバガヴァーンについての話です。

・サッチダーナンダ　（形も性質もない）

サッチダーナンダ、マクロレベルで純粋な意識です。

サッチダーナンダのとき、純粋な意識以外何もない。ですから全知全能遍在という性質とか、宇宙を創るというイメージは出ません。純粋な意識、マクロレベルの純粋な意識だけなので、何もしません。

・バガヴァーン※　（性質がある）

バガヴァーンの意味は「あらわれた」という意味です。ブラフマー、ヒラニヤガルバとも言います。バガヴァーンの性質は、「全知全能遍在、宇宙を創る、宇宙を維持する、宇宙を破壊する」などです。　　　　　編者注：（マハーラージは「ラーマクリシュナ意識」の講話の際に、

「バガヴァーンには性質はあるが形はない」とおっしゃっています）

マザー・カーリーの一つの姿はサッチダーナンダ、ブラフマンです。

またマザー・カーリーはバガヴァーンでもあります。バガヴァーンとしてのマザー・カーリーは、創造、維持、破壊し、欲しいものをあげます。

例えばマザー・カーリーの像の手はそれらのことを示しており、手に持つ剣で破壊を意味し、片手を上げて手のひらを前にして「怖がらない」を、片手のひらを上に向けて「あげる」を意味しています。「あげる」とは、信者の願いを満足させることです。マザー・カーリーはそれらの性質が合わさっています。それがバガヴァーンです。バガヴァーンのイメージがマザー・カーリーです。

ヘビが寝ていると何も働かないが、その同じヘビが動き働きます。同じヘビに二つの状態があります。人も同じことです。寝ている人がまた働きます。同じ人が両方します。そのことについて『ラーマクリシュナの福音』の中に話しの例が出ています。ブラフマンとシャクティの違いと同じことです。

**📖読み**

**『福音』３５頁上段Ｌ１３～１８**

*生きもの、宇宙、心、知性、愛、放棄、知識―これらすべては彼の力のあらわれです。（笑いながら）もし貴族が家も資産ももっていなければ、あるいはそれらを売らざるを得ないことになれば、人はもう彼を貴族とは呼ばないでしょう（みな笑う）。　神は六つの偉大な力を持っておられるのです。そうでなかったら誰がにしたがうものか（みな笑う）。*

（解説）

**バガヴァーンの六つの偉大な力**

神の六つの偉大な力とは、バガヴァーンの定義です。

①すべての富、②力、③名声、④美、⑤ギャーナ、知識、⑥放棄

の六つの性質がある存在がバガヴァーンです。

バガヴァッド・ギーターの中に、「シュリー　バガヴァーン　ウヴァーチャー（バガヴァーンは語られます）」と何度も出てきますが「シュリー　クリシュナ　ウヴァーチャー」　とは言いません。なぜならシュリー・クリシュナはバガヴァーンだからです。

すべての富、この場合の富はふつうの富ではなく、特別な富を持っていることを意味します。

バガヴァッド・ギーター第10章：ヴィブーティ・ヨーガ

（ヴィブーティの意味は、「すべては神」）

すべての、人の中では「王様」、動かぬものの中では「ヒマラヤ」、パーンドゥ家の中では「アルジュナ」、文字（アクシャラナム）の中では「ア」、学問（アッデャートマ）の中では「真我に関する知識」、川の中では「ガンジス河」、動物（獣類）の中では「ライオン」、悪魔の中では「プラフラーダ」、鳥の中では「ガルーダ」（ヴィシュヌ神の運び手です）、ヴェーダの中では「サーマ・ヴェーダ」、韻文の中では「ガーヤットリー」、季節の中では（花咲く）「春」、聖者の中では「ヴィヤーサ」。

そして、私以外何もない。

私の存在の一部分で全宇宙を支えています。すべてに遍在しています。

イーシュワラは無限の力、無限の力、無限の富であり、それを持っている存在がバガヴァーンです。

ここでシュリー・ラーマクリシュナは

*「もし貴族が家も資産ももっていなければ、あるいはそれらを売らざるを得ないことになれば、人はもう貴族とは呼ばないでしょう（みな笑う）」*

と冗談を言っていますが、建物、車などいろいろ持っていると「お金持ち」と言いますが、もし何も持っていないと、その人をお金持ちとは言わない。それと同じように、バガヴァーンは六つの偉大な力を持っているからバガヴァーンなのであって、そうでなければバガヴァーンとは言いません。

**📖読み**

**『福音』３５頁上段Ｌ１９～下段Ｌ１、２**

*この宇宙のなんと絵のように美しいこと、まあ見てごらんなさい。どんなにさまざまなものがあることか！　太陽、月、そして星。またどんなにさまざまの生きものがいることか！　―大きいのや小さいのや、善いのや悪いのや、強いのや弱いのや―あるものはより多くの力を与えられ、あるものはより少ない力を与えられている*」

　*ヴィッディヤ・シャーゴル「はある者たちにはより多くの、ある者たちにはより少ない力をお授けになったのですか」*

（解説）

**ヴィッディヤ・シャーゴルの質問の背景**

シュリー・ラーマクリシュナが、神はある者には大きな力を、また他のある者には小さな姿を授けた、と語られたことについてヴィッディヤ・シャーゴルは反対しました。その理由を説明します。

以前は西洋、日本、インドなどほとんどの国で人への差別がありました。しかしフランス革命（1789～1799年）で平等という思想が出てきてから、すべて平等、同権というヒューマニズムの思想が広まりました。インドにもその思想が入ってきて、ヴィッディヤ・シャーゴルはその影響を受けたのです。そしてヴィッディヤ・シャーゴルは、シュリー・ラーマクリシュナが神は力が多い人、少ない人を創ったと言ったことに対して、「神がえこひいきをするのですか？」と反論したのです。

我々も時々神がえこひいきをしているように感じることはありますね。

例えば二人の隣人同士のうち、一人は神の深い信仰を持っていて深く神に祈り、毎週欠かさず教会に行きます。しかしその人はたくさんの問題や困難を抱えています。片やもう一方の隣人は、神のことを思い出すこともない。それなのに、家族はみんな楽そうで元気でお金持ち。そんなとき「神様、私はこんなに祈っているのに大変です。しかしあの人は神様に祈らないのにどうしてよい状態なのですか？　私の状態もよくしてください」と神に文句を言うことがありますね。神がえこひいきをしているようで、ジェラシーが出ることがあります。それに対するシュリー・ラーマクリシュナの返答を読んでください。

**📖読み**

**『福音』３４頁上段L１３～１６**

　*師「一切所(いっさいしょ)に遍在する霊として、はすべての生きものの中に、アリの中にさえも、宿っていらっしゃる。しかし、の力の現れ方は生きものによって違います。そうでなければどうして、ある者は一〇人の敵を敗走させ、他の者は一人の敵に立ち向かうこともできないなどということがありえましょう。また、なぜすべての人があなたを尊敬するのですか。あなたが二本の角を生やしているとでもいうのですか（笑い）。あなたは他者よりも多くの慈悲心と学識とを持っておられる。それだから人びとがあなたを尊敬し、そして敬意を表しにやってくるのですよ。なるほどとは思いませんか」*

*ヴィッディヤ・シャーゴルは微笑した。*

（解説）

持っている力や性質の違いは、結構あります。そのことすべてをカルマの法則で説明はできません。別の説明の一つは、神がそのように準備した、ということです。

例えばある木の果物はとても苦いだけでなく毒もある。別の木の果物はとても甘い。果物にはいろいろな種類があります。そのことをカルマの法則でどのように説明します？

シュリー・クリシュナの例を一つあげます。

シュリー・クリシュナがブリンダーヴァンにいたころ、ヤムナー川には大きな毒ヘビが住んでいて、そのヘビの毒のせいで大勢が死んでいました。ある時シュリー・クリシュナの友達がそのことでとても困っていたので、シュリー・クリシュナはカリヤ（ヘビの名前）に言いました。「カリヤ、あなたはどうしてそんなに毒を出すのですか？　あなたの毒と水とを混ぜて沐浴するとみんな死ぬんですよ」

カリヤは答えました「神様、あなたが私に毒を与えたのですよ。私には毒以外なにもありません。私にどうしろとおっしゃるのですか？　もしあなたが私に甘露を授けてくだされば、私は甘露を出します」と。

**すべての存在は必要なもの**

この世にはいろいろなことが必要なのです。そしてそのどれも無駄ではない。いい人も悪い人も全部神の創造の中にあります。すべての一つ一つに役割があるのです。

「ヘビは怖いからいらない」と考えるのは、我々人間の考え方です。ヘビにはヘビの見方があります。もし牛、牝牛、鶏、魚の立場だと、「神様、どうして人間を創ったのですか？　彼らは我々を全部殺して食べます」と考えるでしょう。人間はいつも利己的なので、自分の見方で他の生きものの存在の良し悪しを決めますが、生き物にはおのおのの見方があることは、それら生きものと同一視すると分かります。

そしてシュリー・ラーマクリシュナは、すべての中に神はいるけれども、あらわれの度合いが違う、と言っています。

光の反射を例にとって考えてみましょう。砂、水、鏡、はすべて太陽の光を反射しますが、その反射の力はバラバラでしょ。その中で一番反射するのは鏡なので鏡だけが必要、鏡だけで事足りる、ということはありません。砂も水も必要でしょ。鏡で水は飲めませんから。すべては大事です。すべては神が作られた創造物なのです。すべての中に神がいます。そしてあらわれ方はバラバラです。

しかし我々はそのことを忘れて、人間の考え方だけで見てしまいます。

202001『福音』勉強会以上